

実家があった地域の俗称「権道寺」の地名に起因する。

「権道寺」とは、瀬戸市の本地地域から長久手町大草地域に跨る一帯の総称である。その名の由来は、往時その名の寺があったからとも言い伝えられているが、かつて、今は亡き一人のとある郷土史研究家が記した書で、長久手合戦の際この地を通った徳川家康（権大納言家康）の名にちなみ、その軍勢が通った道という意味から「権道路（同じ発音ながら寺ではなく路）」と称したとの説に出会った時は、実に衝撃的であった。

それは私が地方議員になる前、二十代半ばの若き日のことであったが、私は合戦にまつわるその著作を、それが収められた地元の寺から借り受け、また長久手の合戦記も繙き、往時の軍勢がたどったとされる道程を幾日もかけて実際に歩いてみた。当時の軍勢は、何万何千もの将兵が進み、しかも軍兵のみならず輜重部隊（荷駄隊）が通るゆえに、進路は必ずしも一本ではない。しかし、地形その他から、おおよその進軍経路を類推することは可能である。もしかしたら、まさにこの地この道を四百二十年余の昔、具足に身を固めた家康が実際に歩を進めたかもしれないとの想いは、私の胸を熱くした。事実、史書には家康隊が稲葉で矢田川を渡り、本地から市の坂を通過して色金山に登ると記さ

れている。とすれば、やや広域ではあるものの、家康の進軍経路は、権道寺と称される地域の一角に一致する。史書を手に何日も歩きまわった末に、旧道の片隅に、消えかかりながらもかすかに「いちさか（市の坂）」の文字を刻んだ古の石の道標を発見したときの感激は、二十有余年を経た今も尚忘れがたい。その昔、確かにこの地で、歴史を動かす合戦が行われたのだ。

思えば、今我々が暮らすこの土地の上では、すべからく有史以来さまざまな人の営みが繰り返されてきた。同じ山を望み、川を眺め、ここで耕し、笑い、泣き、そして時に戦い、血を流し：そうした先人たちの歴史を受け継いで、今この瞬間に自分たちがここにいる。土地に対する先人たちの想いを受け、たまたま今この瞬間この時代にこの地をお預かりする。そしてまた、命を終えたら次には後世に伝えるのみ。この地で繰り広げられた、そんな何世代にもわたる地上の営みに想いを馳せる時、先人の血と汗と涙の染みこんだ、その土に対する愛着はひとしおになる。

国政に携わる者として、地域に一定の責任ある立場をいただいている今日、与えられた職責に全力で取り組むことが、この地にかけて先人の想いに応え、また後世に対する己の責任であると思っている。